

『可能なる革命』

大澤真幸 2016年 太田出版

野口直樹

あまりに大雑把に分類すれば、社会学の仕事にはイメージの解体とイメージの形成という2種類が存在する。統計やインタビューを駆使して思い込み（イメージ）を解体する前者に対して、複数の事象をグルーピングすることであまりに複雑な世界に一定の共通認識（イメージ）を与える後者。大澤真幸はいうまでもなく後者の筆頭だが、『可能なる革命』においてもその役割は十分に果たされているだろうか。

大澤の代表的な仕事は、戦後日本社会を25年区切りで理想の時代、虚構の時代、不可能性の時代に分類した『不可能性の時代』だ（岩波新書、2008）。1995年から始まる不可能性の時代においては、「現実」から逃避するのではなく、「現実」への逃避が行われる。しかも、それは平和な日常ではなくリストカットやプレイヤーの無力さを突きつける美少女ゲームなどに代表される破局的な「現実」だ。自分の選択に対して「これで良い」という感覚を持つことができない現代では、破局的な「現実」への逃避——大文字の他者の否定——によって逆説的に現実感覚を取り戻すのである。

『不可能性の時代』で形成したイメージは、『可能なる革命』において増長される。古市憲寿『絶望の国の幸福な若者たち』を援用した大澤は、デモに参加する一方で投票に行かない若者の一見矛盾した心理を、大文字の政治行為の否定として説明する。選挙という正当な社会変革を素直に信じることができない現代では、デモという否定によって逆説的に自らの政治

意識を保持するしかない。「終わり」を想起できない日常の連続という『不可能性の時代』刊行時の時代感覚は、原発事故を経て絶望に向かう悪夢の最中へと変化した。「不可能性の過剰」という言葉が示すように、現代こそが真の不可能性の時代なのだ。

理想の時代や虚構の時代がそれぞれ25年続いたことを考えれば、2016年は不可能性の時代の終盤地点にあたる。昨今の社会事象から不可能性の徹底を見て取る本書は、存在自体が『不可能性の時代』の裏打ちであり、かつそのロジックを現代に対応させるという意味で正当な続編ともいえるだろう。

明確な位置づけが可能で一方、評者は本書を読み進める際になんとも奇妙な読書感覚を抱いた。それぞれの章が明快で苦もなく読み進めることができるにもかかわらず、常に食傷気味とでもいうべきげんざりした思いが同居する。評者はもちろん、「不可能性の過剰」という本書の主張に異を唱えたいわけではない。ならば、この感覚は何なのか。古市憲寿『古市くん、社会学を学び直しなさい！！』において大澤は、自身の仕事を人々が言語レベルで認知できない日常感覚を説明するシャーマンに喩えた（光文社新書、2016）。理性のレベルで認知できない感覚を伝えるシャーマンの言葉は受け手に反発感情を抱かせるケースも少なくないが、様々な事象が不可能性によって紡がれる本書には、むしろ時代を綺麗に説明されすぎているような違和感を覚えるのである。

ここから導かれるのは、不可能性というロジックの不備——どの時代にも当てはまってしまう定義の曖昧さ——ではない。むしろ、それを受容する我々の変化だ。大澤がいうように現代が「不可能性の過剰」なのだとすれば、不可能性はもはや知覚困難ではない。現代において不可能性は、シャーマンに告げられるべき複雑な感覚とはいえないのである。

不可能性は、既にあらゆる場所に満ちている。『不可能性の時代』が長期的な価値を持つことができたのは、多くの人々がはっきりと感じ取れていない違和感、そしてこれからその只中に飛び込まんとする時代のイメージを半ば予言として語ったからだ。一方で、本書は2016年を適切に語るというよりは、語りすぎている。血肉化したロジックを説明し続ける本書の筆致に、我々は辟易させられてしまうのではないだろうか。

こうした反論を先取りするかのように、「これまでの主題と逸脱するが」と前置かれた終章では、人間と動物の違いが語られる。資本主義、あるいは人間社会を特徴づけているのは、種族や利害を問わない緩やかな連帯、あるいはそれにも満たない他人の幸福を祈る素朴な祈りだと大澤はいう。これが人間に固有の性質だとしたら、なおさら我々は動物について思いを巡らせるべきだ。動物性から断絶された性質を探るためには、その素となる動物性とは何かを考えるしかないのだから。

人間性の境界を策定するこの章が見据えるのは、明記こそされていないが次なる「不可能性」だ。瀾漫したイメージを手を変え品を変え確認する一方で、本書からは次の時代を察知せんとする大澤の息遣いが、おぼろげながら窺えるのである。

（都市イノベーション学府博士前期課程・建築都市文化専攻）